

平成30年度
大規模肉用牛経営動向に関する調査報告書
【要約版】



平成31年2月
独立行政法人農畜産業振興機構

【要約版】

1 平成 29 年度の経営概況

(1) 飼養頭数

- 平成 29 年度の肥育牛・飼養規模別の経営体数の分布は、「200～300 頭未満」13.8%、「300～500 頭未満」14.5%、「500～1,000 頭未満」19.1%、「1,000～1,500 頭未満」8.8%、「1,500～2,000 頭未満」6.7%、「2,000～3,000 頭未満」6.0%、「3,000 頭以上」7.1%であった。
- 品種別肥育牛・飼養規模別経営体の割合は、黒毛和種が「200 頭以上」で 60.2%、交雑種が「200 頭以上」で 65.9%、乳用種が「200 頭以上」で 63.4%となった。
- 昨年度との平均頭数の比較では、黒毛和種は昨年度：569.0 頭、今年度：634.5 頭。交雑種は昨年度：617.5 頭、今年度：686.5 頭。乳用種は昨年度：693.4 頭、今年度：784.5 頭となった。

(2) 経営土地面積、畜産用地

- 肥育牛・飼養規模別の 1 経営体当たりの経営耕地（平均）は、200 頭以上の経営体が 29.4ha、畜産用地は、200 頭以上の経営体が 39.1ha であった。

(3) 経営形態

- 畜産専業・兼業の状況は、200 頭以上の経営体では「畜産業専業」73.0%、「複合経営」14.0%、「兼業経営」11.6%であった。
- 経営形態は、200 頭以上の経営体では、「肥育専業経営」が 48.8%、「繁殖・肥育一貫経営」が 29.8%、「乳肉複合経営」が 3.7%、「育成・肥育経営」が 13.5%等となっている。200 頭以上の経営体の方が肥育専業経営の割合が高くなっている。また、200 頭以上の経営体では、「繁殖・肥育一貫経営」が増加している（一昨年度 18.1%、昨年度 24.2%、今年度 29.8%）。

(4) 売上高

- 農業経営体全体の売上高は、200 頭以上の経営体では、平均 8 億 7,800 万円となっている。昨年度の 200 頭以上の経営体の平均売上高 7 億 7,200 万円よりも増加した。
- 肉用牛関連の売上高は、200 頭以上の経営体では、平均 7 億 6,200 万円となっている。昨年度の 200 頭以上の経営体の平均売上高 6 億 6,300 万円よりも増加した。
- マルキンの金額は、200 頭以上の経営体で平均 8,200 万円となった。

(5) 労働力

- 肉用牛関連に従事する家族労働力は、200 頭以上の経営体では平均 3.0 人であった。
- 肉用牛関連の正社員は、200 頭以上の経営体では平均 8.3 人であった。
- 肉用牛関連の非正社員は、200 頭以上の経営体では平均 3.8 人であった。
- 肉用牛関連作業における 1 日当たりの平均労働時間は、200 頭以上の経営体では 7.8 時間であった。
- 従業員の労働時間の長さについての意識は、全体で「とても長い方だ」が 1.4%、「まあ長い方だ」が 14.5%、「どちらともいえない」が 62.5%、「短い方だ」が 21.6%となった。

2 生産費（肥育牛 1 頭あたり）

- 品種別に見ると、200 頭以上の経営体では、黒毛和種 1,179,118 円（昨年度 1,133,339 円）、交雑種 721,552 円（昨年度 769,714 円）、乳用種 488,134 円（昨年度 560,248 円）であった。近年のもと畜費高騰を反映してか、今回の調査でも生産費は高い水準を示した。

<生産費（肥育牛 1 頭あたり） 200 頭以上の経営体

	もと畜費 (円)	購入飼料費 (円)	牧草・放牧・探草費 (円)	敷料費 (円)	光熱水道力費 (円)	消耗諸材料費 (円)	獣医師料及び医薬品費 (円)	賃借料及び料金 (円)	物件税及び公課諸負担 (円)	建物費 (円)	自動車費、農機具費 (円)	生産管理費 (円)	労働費 (円)	支払利子 (円)	支払地代 (円)	副産物価額 (円)	生産費 (円)
黒毛和種	713,459	240,553	19,974	15,773	18,314	6,526	15,828	17,949	12,121	37,634	14,272	5,895	55,931	11,489	4,200	10,800	1,179,118
交雑種	370,084	210,752	13,516	11,169	11,254	4,753	8,772	15,642	8,531	19,097	9,389	2,095	35,826	6,961	7,923	14,212	721,552
乳用種	237,796	152,501	17,303	11,407	7,650	2,749	7,456	8,641	3,701	8,561	6,415	4,282	20,421	4,687	4,013	9,449	488,134

※生産費は、費用合計から副産物価格を控除した上で、支払利子及び支払地代を加えたものを指す。

3 もと畜の導入状況

- もと畜の年間外部導入頭数は、「黒毛和種」が 262 頭（昨年度 274 頭）、「交雑種（初生牛）」が 443 頭（昨年度 451 頭）、「交雑種（子牛）」が 573 頭（昨年度 496 頭）、「乳用種（初生牛）」が 386 頭（昨年度 917 頭）、「乳用種（子牛）」が 664 頭（昨年度 640 頭）となった。
- 1 頭当たりの導入価格は、「黒毛和種」が 709,444 円（昨年度 651,856 円）、「交雑種（初生牛）」が 245,024 円（昨年度 239,250 円）、「交雑種（子牛）」が 369,510 円（昨年度 339,054 円）、「乳用種（初生牛）」が 99,137 円（昨年度 110,061 円）、「乳用種（子牛）」が 236,924 円（昨年度 205,417 円）。
- もと畜を外部から導入する際に重視する点は、黒毛和種は、「血統」「価格」「体型の良し悪し」「健康状態」「発育状態」が上位となっている。交雑種（初生牛）は、「健康状態」「価格」「血統」「発

育状態」「体型の良し悪し」が上位となっている。交雑種（子牛）は、「健康状態」「価格」「血統」「発育状態」「体型の良し悪し」が上位となっている。乳用種（初生牛）は、「健康状態」「発育状態」「価格」「体型の良し悪し」が上位となっている。乳用種（子牛）は、「健康状態」「発育状態」「体型の良し悪し」「価格」が上位となっている。

■もと畜は、黒毛和種、交雑種、乳用種のいずれも「家畜市場」からの調達が多い。200 頭以上の経営体で見ると、黒毛和種は 94.0%、交雑種は 85.0%、乳用種は 58.1%である。

4 肥育牛の出荷状況

■黒毛和種の年間出荷頭数は、200 頭以上の経営体で平均 497 頭である。枝肉単価の平均は、市場出荷で 2,420 円/kg、相対取引で 2,374 円/kg となっており、市場出荷と相対取引の価格差はほぼ見られない。

■交雑種の年間出荷頭数は、200 頭以上の経営体で平均 692 頭である。枝肉単価の平均は、市場出荷で 1,349 円/kg、相対取引で 1,387 円/kg となっている。黒毛和種と同様に、交雑種でも市場出荷と相対取引では、大きな価格差は生じていない。

■乳用種の年間出荷頭数は、200 頭以上の経営体で平均 1,066 頭である。枝肉単価の平均は、市場出荷で 995 円/kg、相対取引で 987 円/kg となっている。

■年間の副産物（きゅう肥）の状況は、200 頭以上の経営体で、平均年間販売数量が 1,542 トン、金額が 739 万円となっている。

■市場出荷の実施は、200 頭以上の経営体で平均 4.2 割、相対取引の実施は、平均 5.8 割となっている。相対取引の相手先は「法人」が 8 割であり、地域も「県内」が多い。

5 繁殖雌牛の種付状況

■黒毛和種の主な種付方法は「人工授精」であり、受胎率は 75.9%となっている。

■交雑種の主な種付方法は「受精卵移植」であり、受胎率は 67.0%となっている。

■乳用種の主な種付方法は「人工授精」「受精卵移植」であり、受胎率はそれぞれ 57.5%、65.0%となっている。

6 飼料の給与状況

■給与している飼料は、200 頭以上の経営体では「成畜用配合飼料（72.6%）」「稲わら（67.9%）」「ふすま（39.5%）」「とうもろこし（穀実）（39.1%）」「大麦（穀実）（35.8%）」「いね科・イタリアン

ライグラス（乾牧草）（34.0%）」「大豆油かす（32.1%）」「ビールかす（30.7%）」等が上位である。

- 肥育牛の給与状況（1日あたりの1頭への給与量）を見ると、肥育前期では7.7kg、肥育中期では10.3kg、仕上げ期では9.8kgとなっている。

7 敷料の使用状況

- 敷料については、「おが粉」が圧倒的に多く、200頭以上の経営体の使用率は88.8%となっている。

8 取り組んでいる経営努力

- 200頭以上の経営体が現在行っている経営努力は、「低価格な飼料調達に努めている（63.7%）」「従業員の安全を確保（49.3%）」「機械化を積極的に進めている（42.3%）」「長時間労働をさせない（32.1%）」「自社ブランドを確立し、出荷金額を高めている（31.2%）」「もと畜を低コストで導入する（30.2%）」等が多い。
- 今後3年間の経営展開について、200頭以上の経営体では「増頭」が31.6%、「現状維持」が56.7%であり、「減少」「生産しない」が11.6%となっている。
- 200頭以上の経営体が増頭する理由は、「売上高を増加させるため」が64.7%ともっとも多く、次いで、「出荷先があるため」が39.7%となっている。
- 規模拡大への課題について、200頭以上の経営体では、「子牛の導入価格・販売価格の動向（55.9%）」「施設・機械の更新・拡大（51.5%）」「資金繰り（45.6%）」「肥育牛の販売価格の動向（44.1%）」等の課題がある。
- 一方、経営規模を「現状維持」「減少する」理由は、「もと牛価格の高騰」が55.1%を占めている。

9 従業員確保のための対策

- 「募集方法」は、「特段の対策はしていない」との回答が半数近くを占める。しかしながら、200頭以上の経営体では「ハローワーク」が39.5%、「人材派遣・人材紹介会社のサービス（募集専用サイトなど）」が20.5%などとなっている。
- 「待遇改善」は、200頭以上の経営体では「賃金のアップ（37.2%）」「キャリアパス（職階と業務）の提示（29.3%）」「機械化・IT化を推進し、人的負担を軽減している（17.7%）」「社宅の確保や家賃補助など（15.8%）」「休日を多くする（週休2日、長期休暇）（15.3%）」「シフト勤務などの柔軟な勤務体制の導入（15.3%）」など、多岐にわたる取組みが行なわれている。